学位（博士）論文　要旨

敦煌講唱體文獻の生成と發展に關する研究

髙　井　　龍

廣島大學大學院綜合科學研究科

Study on the Development of Chinese Prosi-metric Texts

Ryu TAKAI

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

1900年に敦煌莫高窟より發見された大量の文獻群は、9、10世紀の資料を主とする5世紀から11世紀初頭までの寺院文書である。

この敦煌文獻の内容は、極めて多岐に亙る。その中でも、中國文學史、特に中國俗文學史の理解に貴重な資料として識者の關心を惹いたのが、講唱體で書かれた文獻であった。

講唱體とは、散文の語り（講）と韻文の詠い（唱）とを繰り返す文體を指す。これは、宋代以降の俗文學へと繼承されたものであることから、敦煌の講唱體文獻は、俗文學研究においても極めて重要な資料とされてきた。

そのような敦煌の講唱體文獻の中に、變や變文と題されたものがある（以下、變文文獻）。これら變文文獻は、轉變という、紙芝居の如き繪解き藝能と密接に關わるため、繪畫との關わりを示唆する文句を有するものが少なくない。例えば「看……處，若爲陳説。」（……の場面、いかに語りましょうや。）などの文句が、韻文の前の定型句として使われるのである。

しかし、講唱體文獻の生成や發展過程は、決して轉變との關わりからのみ考えられるものではないことが、近年明らかにされつつある。その中でも、今なお解明されていない問題を孕む文獻が、S.3491V「頻婆娑羅王后綵女功德意供養塔生天因緣變」、一名「功德意供養塔生天緣」と、P.3048「醜女緣起」、一名「醜變」である。これら兩文獻に見られる緣や因緣の語は、もともと經典中の因緣譚に冠される語である（以下、緣起類）。つまり兩文獻においては、繪解きに關わる變文と經典的要素を持つ緣起類とが交錯した名稱が冠されているのである。この意味するところが解明されるならば、その成果は敦煌講唱體文獻の生成過程の解明に繫がるとともに、中國講唱體文學の創成期にいかなる動きが働いたかの解明にも繫がるであろう。更にそれは、宋代以降の俗文學の變遷を考えるに當たっても、大きな示唆を與えることになる。本論は、この問題に焦點を當て、新たに講唱體の發展過程を明らかにせんことを試みるものである。

本論の研究方法としては、まず、敦煌の講唱體文獻を概ね10世紀文獻と見做す先行研究の成果を基礎に置く。だがこのことは、變文文獻との關係が窺われる講唱體の緣起類を考えるに當たって、講唱體ではない10世紀以前の緣起類と區別する必要性を意味してもいる。よって本論は、講唱體緣起類と非講唱體緣起類という區別を行い、從來の研究では十分な着目を浴びてこなかった非講唱體緣起類から講唱體緣起類への發展變遷史を考察する。この點においても、本研究手法は、講唱體文獻研究に新たな視野を提供するものとなるだろう。

また、本研究を遂行するに當たっては、国際敦煌プロジェクト（http://idp.bl.uk/idp.a4d）やフ

ランス國立圖書館（http://gallica.bnf.fr/）、臺灣の傅斯年圖書館（http://lib.ihp.sinica.edu.tw/pages/03-rare/dunhuang/chineseindex.htm）がインターネット上に公開しているデータベース畫像や、これまで出版されてきた圖録を用いるだけでなく、研究對象となる敦煌文獻を所藏する大英圖書館とフランス國立図書館へ行き、實見調査を行った。その結果、從來見逃されてきた文獻上の特徵やその用途を明らかにできたことも、今後の當該分野の研究に資する成果となっている。

本論は、具體的には以下のように進められた。

第一章 「轉變」考

これまで數多くの研究者が、轉變や變文の變の字義、或いは變文とは何かを考えてきた。2000年以降でも諸説紛々たる状況が續く中にあって、近年轉變に關する新たな資料が發見された。韓國の『夾注名賢十抄詩』に收められた中唐詩人・李遠の「轉變人」であり、變と繪畫の結びつきを明瞭に傳える資料である。本章第一節では、該詩と他の轉變を詠んだ詩との關わりも踏まえながら、變が繪畫や畫巻と關わる語句であることを述べた。

續く第二節では、その畫巻を聽衆に見せながら故事を詠い聞かせる轉變を扱った。轉變に使われた畫巻は、現在までのところ、P.4524「降魔變畫巻（擬）」に最も詳しい。筆者は當該寫本を實見調査した結果、從來我々に提示されてきた寫眞資料からは窺い知ることのできなかった特徵――畫巻の用い方、轉變人と文字資料との關わり――を明らかにするとともに、當該寫本が莫高窟内に收藏された經緯についても、廃棄文書としての角度から明らかにした。

第二章 “變”から“變文”へ

第一章で見た轉變は、變文文獻の母體とも言い得るものである。その變文文獻は、時に變と題され、また時に變文と題されている。この變と變文の關係については、一般に、變が變文の略稱であると考えられてきた。しかし、この見解に對する異論は、僅かながら、梅津次郎氏、金岡照光氏、那波利貞氏、饒宗頤氏によって提示されてもいる。彼らの見解は、變が變文の略稱なのではなく、變文こそ變の衍稱であると述べたものである。本章では、梅津氏と金岡氏の論考に基づきながら、具體的に變文という名稱の發生時期を考えた。特に、講唱體で書かれながらも今なお8世紀半ばの寫本と目されることの多い「降魔變文」を取り上げ、それが10世紀の文獻であることを檢證し、併せて變文文獻全體が概ね10世紀に成立していること明らかにした。そして、變文という名稱の發生には、口頭藝能でもある繪解きで語られた故事の文獻化が關わることを指摘した。

第三章 敦煌本「祇園因由記」考

本章では、第二章でも取り上げた「降魔變文」の故事が、特に晩唐以降の敦煌で廣範に流布した背景を考える。これは、轉變とは異なる角度から變文文獻の由來を考察する研究とも言える。そして、「降魔變文」には、8世紀後半の敦煌に生きた高僧・曇曠（生沒年不詳）や、「祇園因由記」という祇園精舍建立説話が大きく關わっていることを明らかにした。それはまた、9世紀における『維摩經』の教學や對俗講經とも深く關わることで、敦煌に深く根付く故事となったものである。これらの複數の要因が重なったことに、10世紀敦煌の「降魔變文」の流布が窺われるのであり、またそれは、變文文献の生成背景に、民間藝能の要素とは異なる對俗講經との關わりもあったことが窺われるのである。

第四章 緣起類發展史考

本章では、10世紀敦煌において、變文と講唱體緣起類が交錯するに至った歴史的背景を明らかにした。まず、P.3000「諸經略出因緣巻」を起點とし、六朝時代以降の唱導と非講唱體緣起類との關係をまとめた。その中でも筆者は、經典中の因緣譚が、民衆への講經に合うように削略され、抄出されていった過程に着目した。次に、9世紀半ばから10世紀頃に書寫されたであろうBD3578を取り上げた。當該文獻は、P.3000と同じく非講唱體緣起類を抄出した文獻であるが、『賢愚經』等の經典の故事を大幅に書き換えた内容となっている。このような經典の削略や抄出、書き換えのあり方を踏まえ、非講唱體緣起類が對俗講經と密接に關わることを明らかにするとともに、講經において講唱體緣起類へと連絡すること、竝びにその變遷過程を明らかにした。

第五章 「金剛醜女緣」考

敦煌文獻中、「金剛醜女緣」と呼ばれる故事を記した寫本は合計5點（S.2114V、S.4511、P.2945V、P.3048、P.3592V）殘されており、全て講唱體で書かれている。筆者はこれら5點の内容を比較した結果、P.3048にのみ、他の4點にはない大きな書き換えが行われていることが分かった。これまでにも、「金剛醜女緣」の翻刻は幾度も斯界に提供されてきたが、P.3048の獨自性が取り上げられることはなかったと言える。しかし、P.3048は、内容上、他の4點の「金剛醜女緣」寫本とは別に扱わねばならない。そして、この點に着目した結果、筆者はP.3048にのみ、變文との關わりを示す「醜變」という眞題が併せ冠されていることを明らかにした。この成果を踏まえ、講唱體緣起類と變文が交錯した姿を浮かび上がらせた。

筆者はこれら全五章の考察を通じ、宋代以降の俗文學の源流とも言われる敦煌の講唱體文獻において、變文と緣起類の交錯した背景を明らかにし、またそこに潜む要因についても、新たな角度から解明できたであろう。